

開港の

ひろば

YOKOHAMA
ARCHIVES
OF
HISTORY

Number

156

横浜開港資料館
発行日 / 2024(令和6)年2月29日



特集 神奈川奉行

p.2-5

特集「神奈川奉行」 -開港都市横浜を治める-

p.6-7

調査報告「震災の記憶が刻まれた墓碑」
-シングルトン・ベンダ商会と井上美吉-

p.8-9

ミニ展示「丹沢地震と横浜」 -被災者の記録を中心に-

p.10-12

トピック / 閲覧室より / 資料館だより

ペリー横浜来航170周年

神奈川奉行

——開港都市横浜を治める——

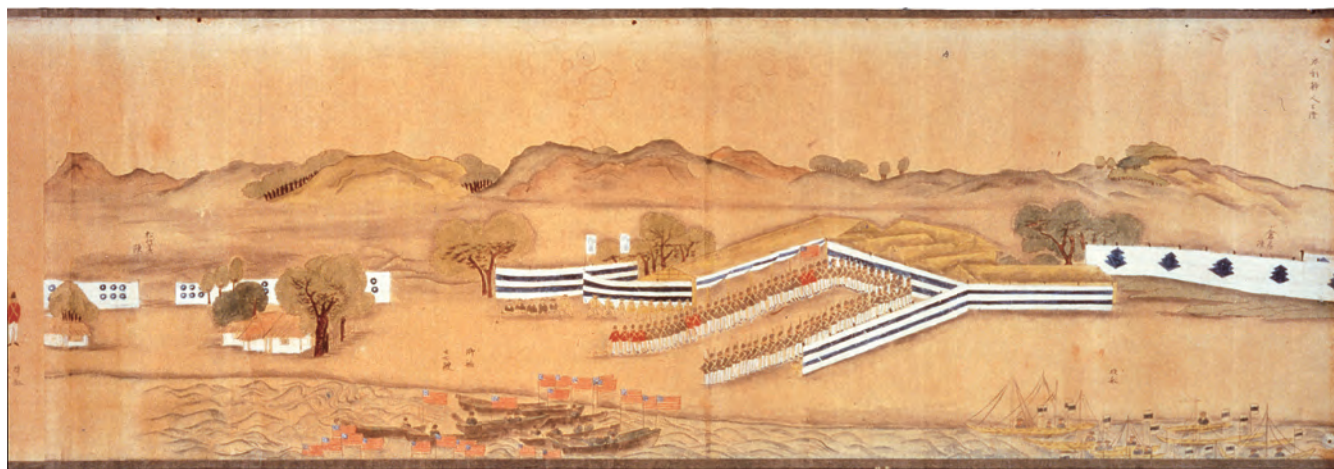


図1 「黒船来航横浜絵巻」当館蔵 横浜村に設置された応接所付近を描く。

はじめに

今年(二〇二四年)は、幕府がペリーと日米和親条約を締結してから一七〇周年にあたる。

嘉永六年(一八五三)六月三日、四隻の軍艦を率いてアメリカ合衆国東インド艦隊司令長官のマシュー・ペリーが浦賀に来航。久里浜で大統領の国書を日本側に渡し、翌年の再来航を告げて日本を離れた。そして、翌安政元年(一八五四)一月一日、ペリー艦隊は浦賀に再び姿をあらわす。条約の交渉地は横浜と定まり、二月一日、ペリーは横浜村に上陸。三月三日、まさに当館が建つ場所で日米和親条約が締結された。

江戸時代の日本はいわゆる「鎖国」という体制をとっており、異国や他民族との交渉窓口は長崎・対馬・薩摩(琉球)・松前という江戸から遠く離れた四か所に限定されていた。つまり、外国の外交官と恒常的に外交交渉をおこなう、という近代的な外交体制は整っていなかった。しかし、日米和親条約とそれに引き続き日米修好通商条約の締結によって、幕府は欧米の外交官との交渉を担当する常設的な役職を設立することになる。安政五年(一八五八)七月に創設された外国奉行である(組織としては外国方と呼ばれる)。一方、開港都市横浜には神奈川奉行(所)が置かれ、開港場に来航した外国人の対応や、横浜とその周辺地域の支配をおこなった。ペリー来航が日本におよぼした影響はさまざま

だが、日本に新たな「外交」体制の構築を迫った、という点も見逃すことができない。しかし、外務省と神奈川県の前身にあたるこのふたつの組織については、これまで研究がほとんどなされていない。

当館ではペリー横浜来航一七〇周年を記念して、本年の九月二日(土)から一月二四日(日)まで特別展「外国奉行と神奈川奉行」(仮称)を開催する。展示ではふたつの組織の実態をあきらかにするほか、外国人との折衝の最前線で活躍した「外交官」たちの姿も浮き彫りにする。

神奈川奉行とは

特別展で扱うふたつの組織に関して二回に分けて本誌で紹介したい。今号では神奈川奉行(所)の施設と業務について当館の資料から見えてみよう。

神奈川奉行は当初、外国奉行が兼務するかたちで設置された。安政六年(一八五九)六月四日、横浜開港の二日後に五名の外国奉行に神奈川奉行との兼務が命じられ、二名が交代で神奈川(横浜)に派遣されることになった。さらに万延元年(一八六〇)九月一日、初めての「専任」神奈川奉行として松平康直・都筑峯暉が任命される。ことに松平康直はみずから専任の奉行として横浜に赴くことを望み、着任後は「事務阻滞(停滞)する所なく、中外人の仰ぐ所と」なったという(田辺太二「幕末外交談」)。康直はのちに文久遣欧使節の

副使となり、さらには老中に進んだ人物である。図2は横浜開港五〇年(明治四二年(二九〇九))を記念した絵葉書に描かれた康直の肖像画だが、開港から半世紀が経過した時点でも、松平康直が開港ゆかりの人物として認識されていたことがわかる。しかし、現在では康直の横浜での仕事はあまり顧みられていないようである。

戸部役所と運上所

神奈川奉行所の施設・組織は大きくふたつに分けられる。ひとつは現在の神奈川県立図書館の場所に位置していた戸部役所である。神奈川奉行は横浜とその周辺の村々を「預所」として治めていたが、戸部役所では支配領域の年貢の徴収、道路や橋の工事、裁判などの行政事務をおこなった。くわえて、外国人が散歩する区域(原則横浜から十里(約三九キロ)四方)の取り締まりにも関与した。戸部役所の写真は残っていないが、奉行所の役人が居住した役宅の写真を当館は所蔵



図2 松平康直の肖像画 「神奈川奉行松平岩見守康直像」(絵葉書) 明治42年(1909) 当館蔵

している(図3)。撮影は横浜開港直前に来航したスイス人写真家ピエール・ロシエ。横浜開港前後の出来立ての「官舎」ということになろう。

一方、開港場には運上所(一種の税関)が置かれた。現在の神奈川県庁本庁舎の位置である。運上所では関税の徴収のほか、外国艦船の出入港の手続きや外国人の応接・監督など、現在の税関業務より幅広い貿易・外交事務を取り扱った。波

止場にほど近い運上所の姿は、横浜の街並みを描いた絵図・浮世絵などから確認することができる(図4)。

当館は、神奈川奉行所に関係する施設を絵図上に示した帳面を所蔵している(「御役所其外地割絵図」)。波止場付近には「改所」「御船屋」が見え、運上所の裏手には「通詞御役宅」「英学所」などの文字が記される(図5)。さらに戸部の奉行所の付近には「見張所」「屯所」

「上番長屋」「下番長屋」(上番・下番は警備兵)などと書かれている(図6)。港湾管理、通訳とその養成、開港場警備など、神奈川奉行に関連した多様な業務をこの絵図からうかがうことができよう。なお、本資料は今回の展示にあわせて地図のリライトと翻刻をおこなっており、展示会場で紹介したい。



図3 神奈川奉行所の役宅 ロシエ撮影 安政6年(1859) 当館蔵 ステレオ写真

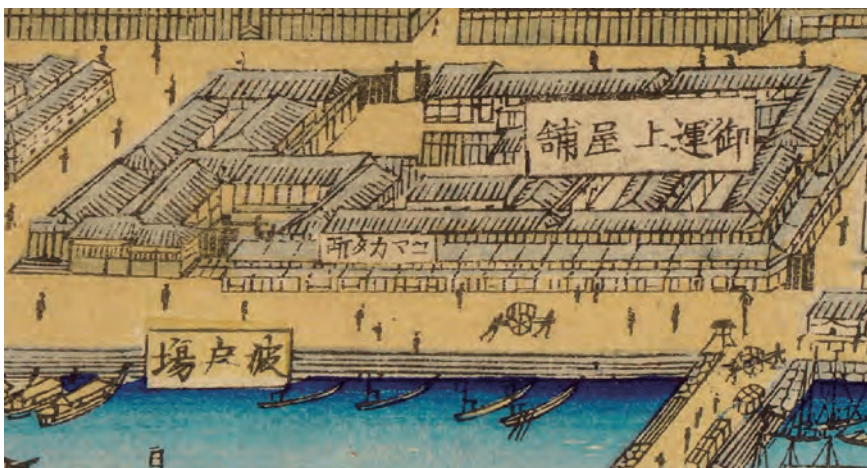


図4 運上所 「増補再刻御開港横浜之全図」五雲亭貞秀画 慶応2年(1866) 当館蔵

税関業務の実態

神奈川奉行支配調役という役職をつとめた小笠原甫三郎という幕臣がいる。神奈川奉行の下にあつて多様な実務を担つた「官僚」である。当館では、子孫より甫三郎に関わる史料群の寄託をうけているが、そのなかに奉行所の業務の一端がわかる甫三郎の手控え(メモ)が含まれていた。ここでは税関の業務を紹介してみよう。

「外国人が運上所に来て「差出書」(申請書)を提出すると、それを通詞たちへ命じて和訳させたうえで、係の者とも数字を確認(算入吟味)し、「立会方御目付方」(監察部局)に書類をまわす。ふたつの部署でもそれぞれ書類を確認して「見留印」(確認印)を捺す。それから「免状」(許可書)を作成し、外国語(横文字)を加えて外国人に渡す。」(「水先案内、外国人病死、洋銀貿易品輸出、難破船等覚書」)、当館寄託(小笠原家文書) 図7)。

以上のようなプロセスを踏む日本側の税関手続きには時間がかかり、外国人から不満が出たようである。甫三郎のメモでも「西洋諸州の簡易迅速の風習にくらべて「遅緩の取扱」であることを認めている。しかし、外国人が提出する書類が長文の場合には翻訳や税額計算に時間をとられ、また「税額を減らすため元の価格を下げて「偽作」した書類を差し出す」不届き者もあり、その場合はあらためて「増税」を指示しなければならぬ」と甫三郎は記している。

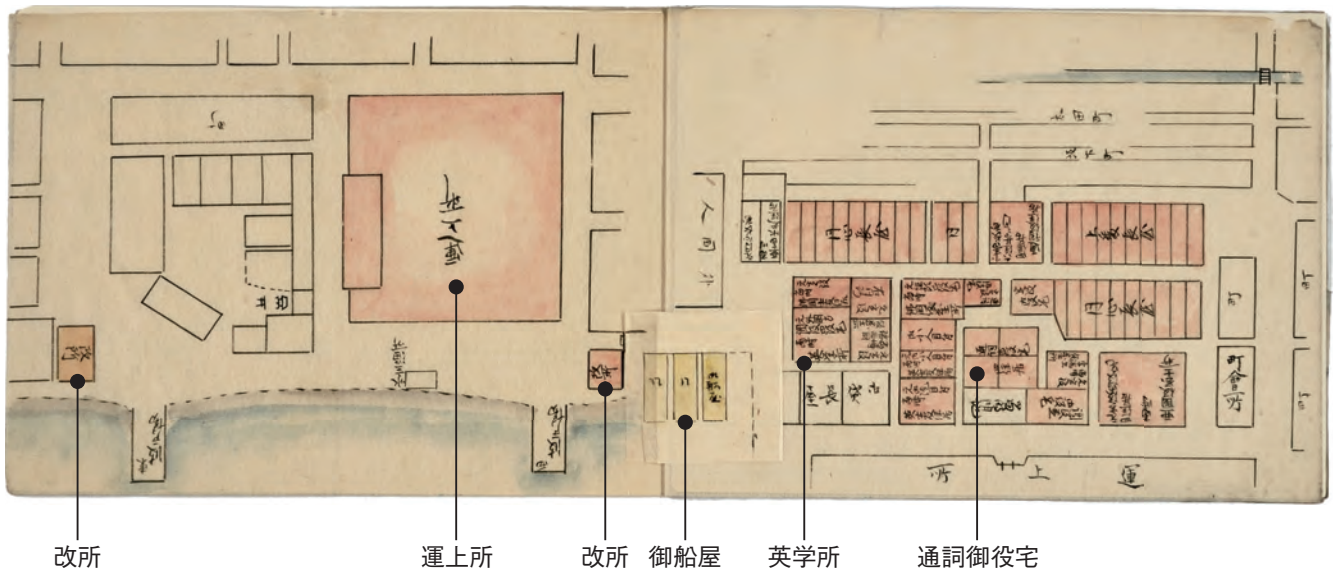


図5 波止場付近「御役所其外地割絵図」当館蔵(五味文庫)

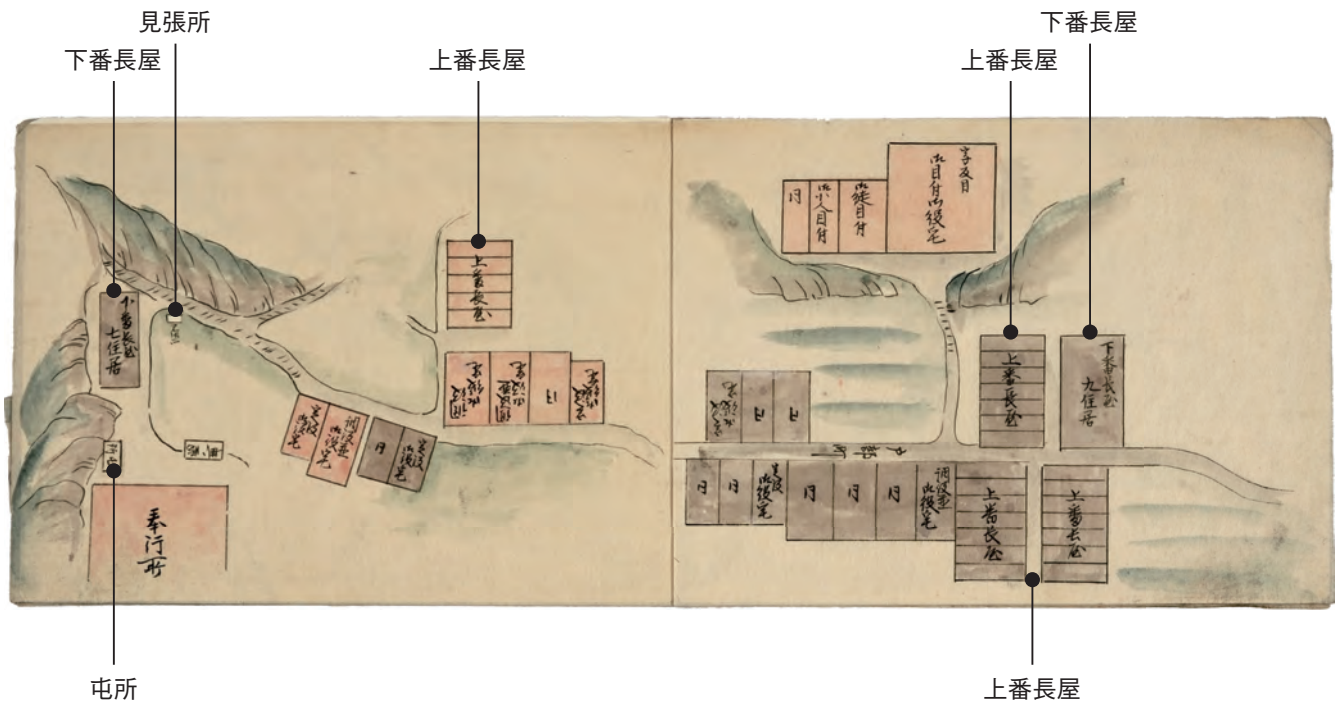


図6 戸部役所付近「御役所其外地割絵図」当館蔵(五味文庫)

神奈川奉行所の税関業務の実態と苦勞がうかがわれる記述である。

横浜の街なかでの事件

神奈川奉行は横浜の市街地の取り締まりにもあたった。当館の所蔵する史料群のなかに、開港場で発生した事故を神奈川奉行所の書役(斎藤録郎)が記録した古文書がある。この文書を読み解いてみると、開港場ならではの事件も垣間

見ることが出来る。

文久二年(一八六二)一月のこと、名古屋の桑名町(現名古屋市中区)にある尼寺・長昌院の長源という六八歳の尼僧は、寺を發つて東海道を東に向かった。二二日に保土ヶ谷宿に到着して一泊した長源は、開港してまもない横浜の開港場を見物したかったのだらう。翌二二日に横浜開港場に入った。本町二丁目という三井も出店を構えていた街のメインストリートをそぞろ歩いていた長源は、外国人が乗って駈けてきた

二頭の馬に踏み倒されてしまう。外国人はいったん降りて、見慣れぬ銀(外国貨幣か)を一枚、長源のそばに置いたが、すぐに馬に乗ってどこかへ立ち去っていった。長源の身体に傷はなかったが、鼻から出血した状態で亡くなっていたという。ついに犯人は突き止められなかった(「検使書類(神奈川奉行所触留)」当館蔵(五味文庫)、図8)。

外国人と日本人とで雑踏する横浜では、両者が関係する不慮の事故も発生した。華やかなイメージがある開港場で起こ

た知られざる悲話である。神奈川奉行所はこういつた街で発生した様々な事件や問題の処理にもあたっていたのである。外国に開港したばかりの横浜を治めるのには、とりどりの苦勞があった。

外国奉行と神奈川奉行に関係する史料は東京大学史料編纂所・国立歴史民俗博物館など他機関にも所蔵がある。当館では今年度両機関の研究者と連携するかたちで幕府の外交組織と外交官たちの調査研究を進めており、秋の特別展ではその成果をわかりやすく皆さんにお伝えしたいと思う。

なお、二〇二四年は通年、常設展二階のミニ展示コーナーでペリー横浜来航関係資料の展示をおこなう。こちらもあわせてご覧いただきたい。

(吉崎雅規)

参考文献・横浜市編『横浜市史』第二卷(横浜市、一九五九年)、田辺太一『幕末外交談』(一八九八年、覆刻東京大学出版会、一九七六年)、石崎康子「小笠原家文書にみる神奈川奉行所関係文書」その一(『横浜開港資料館紀要』第一二号、一九九四年)。

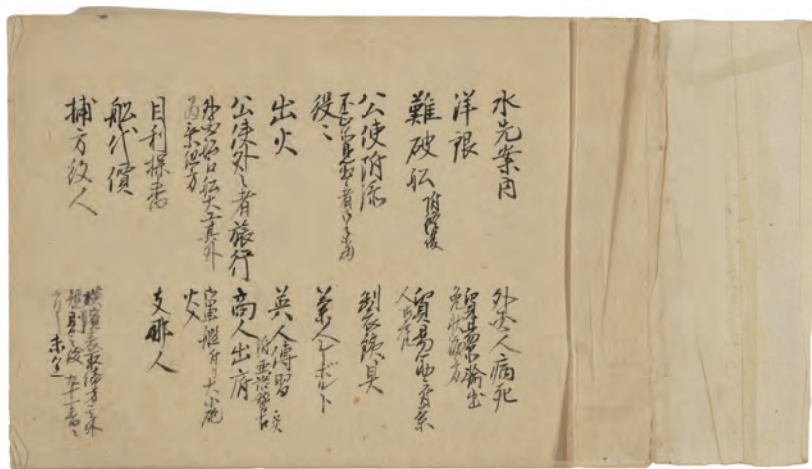


図7 神奈川奉行所の業務の手控え〔水先案内、外国人病死、洋銀貿易品輸出、難破船等覚書〕当館寄託(小笠原家文書)



図8 横浜の街の事件簿「検使書類(神奈川奉行所触留)」当館蔵(五味文庫)

震災の記憶が刻まれた墓碑

— シングルトン・ベンダ商会と井上美吉 —



図1 妙香寺に残る「九六館」の墓碑 2023年5月、筆者撮影

昨年(二〇二三年)は、一九二三(大正二二)年に発生した関東大震災から一〇〇年の節目の年であった。二万六千人を超える死者・行方不明者が出た横浜では、震災後、犠牲となった人々を悼む墓碑や慰霊碑が各所に建てられた。旧イギリス総領事館の建物である当館旧館の記念ホール(かつての領事館の待合)には、震災で命を落としたヘイグ副領事をはじめ、四名のイギリス人の名前を刻んだ慰霊の銘板が設置されている。

武村雅之による調査では、二〇一三年の時点で、関東大震災の記憶を伝える慰霊碑や遺構が、横浜地域で一一九件報告されている(武村雅之「横浜における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構」『横浜都市発展記念館紀要』第一〇号、二〇一四年)。墓碑・慰霊碑については、

地域住民が中心になって建てたもの、会社団体がその従業員のために建てたものなど、設置主体はさまざまである。筆者もかつて、関東大震災九〇年の展示を担当した際に、震災で亡くなったユナイテッドクラブの日本人従業員二十五人の墓があることを、ご遺族から教えていただいた。外国商館が建ち並ぶビジネスエリアであった山下町では、外国人だけでなく、そこに勤めていた多くの日本人が犠牲になっている。

本牧山妙香寺に残る「九六館」の墓も、ユナイテッドクラブと同様に、外国商館で命を落とした従業員を弔ったもののひとつである。上記の武村報告には掲載されていないもので、ここで紙面を借りて紹介しておきたい。

妙香寺に残る震災犠牲者の墓

日本吹奏楽発祥の地、また君が代発祥の地として知られる日蓮宗寺院本牧山妙香寺(中区妙香寺台)の墓地の一画に、「九六館内歿死者之墓」と刻まれた墓碑がある(図1)。高さ一mほどの板状の墓碑で、裏には「大正十三年九月一日建立 山下町九六 シングルトンベンダ社」と刻まれている。「シングルトンベンダ社」とは、震災当時、山下町九六番地にあったイギリス系総合商社のシングルトンベンダ商会(Singleton, Benda & Co., Ltd.)のことで、震災から一年後に、同商会の建物で亡くなった人を弔ったものであることがわかる。

同商会は、おもに陶器・漆器など美術工芸品の輸出や自転車の輸入などで知られており、社屋があった山下町九六番地は、現在の場所でない



図3 石灯籠に刻まれた奉納者 2023年5月、筆者撮影



図2 シングルトン・ベンダ商会 “Present-day Impressions of Japan”(1919)掲載

えば、中華街の開港道に面したローズホテル横浜の敷地にあたる。外国人住所録から同社の地番の変遷をたどると、一八九六(明治二九)年頃に、前身であるレヴィ商会(M. Levy & Co.)が七六番地から九六番地へと新築移転しており、新社屋建設とあわせて、一八九八(明治三一)年頃にシングルトンベンダ商会へと事業が継承されたと考えられる。大正期の外国商館

の状況が詳しく記された『Present-day Impressions of Japan. (1919)』によると、同商会社屋の付属施設として、高価な取扱品を大量に保管するための煉瓦造三階建ての倉庫二棟があったという。同書には横浜支店と神戸支店の外観写真が掲載されており(図2)、左側が横浜支店の煉瓦造倉庫、右側が神戸支店の社屋である。なお、当館編『図説 横浜外国人居留



図4 山下町の被災状況 西野芳之助撮影、1923(大正12)年、当館蔵

地』の「居留地人物・商館小事典」に掲載されている同商会の写真は、誤って右側の神戸支店の写真が掲載されている。この場を借りて訂正したい。

墓碑の左側にある石灯籠には、奉納者として「九六会」「五二会」「名古屋」の文字が刻まれており、その下には「大川」「豊田」「荒川」「中村」「日比」「長谷川」と六人の名前が刻まれている(図3)。「九六会」と

「九六館」で命を落とした 井上美吉

一九二二(大正一一)年九月一日の関東大震災で、山下町一帯は壊滅的な被害を受けた。震災直後の被災状況を撮影したガラス乾板写真には、荒涼とした風景のなかで、シングルトンペンダ商会の煉瓦造倉庫が壁だけを残して倒壊した様子が捉えられている(図4)。写真手前から中央に伸びる道は、本村通り(現在の南門シルクロード)にあたり、突きあたりで左に折れて、現在の開港道へとつながっている。写真左手に大きく写る、一階部分だけを残した煉瓦の廢墟が、シングルトンペンダ商会の残骸である。

この場所で命を落とした同商会の従業員の一人在、井上美吉(一八五八〜一九二三、図5)である。横浜開港の前年に、尾張藩下級武士の家に生まれた美吉は、明治二〇年代後半に、妻と長男とともに横浜へと移り住んでいる。名古屋の洋学校で学んだ美吉は英語

織と考えてよいだろう。「荒川」は神戸支店の番頭格であった荒川由蔵か。そして「名古屋」は、同商会の主要な輸出品であった自転車を取り扱う名古屋の有力な取引先(日比「長谷川」と考えられる。

力に秀でていたと伝えられ、一九〇〇(明治三三)年発行の『日本紳士録』に、シングルトンペンダ商会の「通訳掛」として名前が記載されていることから、開業当時から在職していた可能性が高い。伝承によると、震災の



図5 井上美吉(中央)
1902(明治35)年、個人蔵

際、美吉はいったん建物の外に逃がれたが、揺れが収まったことからまた建物へと戻り、その直後に建物が倒壊したという。関東大震災では、最初の地震から五分のあいだに、同規模の強い余震が二度あったことが知られている。おそらく最初の余震で建物が倒壊したのであろう。美吉の帰りを心配して待っていた家族のもとには、同僚から死亡の知らせがあったという。美吉も含め、亡くなった従業員の身元確認はできないままであった。

妙香寺の墓碑は、こうした背景から、震災で命を落とした従業員たちの供養のために、震災の一周忌に、同商会によって建てられた。震災から一〇〇年にあたる昨年(九月一日)は、井上美吉の一〇〇回目の命日であった。翌九月二日には、遺族有志によるささやかな慰霊の集いがおこなわれたという。本稿作成にあたっては、井上家から多大なご教示を賜りました。記して感謝いたします。

(青木祐介)

丹沢地震と 横浜 被災者の記録を 中心に

展示
三一

災害に備える際の格言に「天災は忘れ
た頃にやってくる」という言葉がある。こ
れは物理学者で、『天災と国防』などを
著した寺田寅彦が述べた言葉だとされ
ている。一九二二(大正一一)年九月一

日に発生した関東大震災から四ヶ月後、
被災した横浜の人びとは落ち着きを取
り戻しつつ、新たな気持ちで新年を迎え
ていた。現在の横浜市港北区、大綱村の
村長であった飯田助夫は日記(飯田助知
氏蔵)に「歳次茲に改まり、大正十三年
を迎ふ。顧みれば昨秋は古今無比の大震
火災に遭遇し、之迄の新年よりも一種
異様の気分を以て、何人も新年に入り更
始一新、生面打開、復興活動以て生活の
安定を得て共に存じ、共に榮へ、自他共
に一段の進運を祈る」と、復興にむけた
覚悟を記している。また、郷里の松山で
新年を迎えた八木熊次郎(元街尋常高
等小学校教師)は、「復興の新年だ祝へ祝
へ」と知名の方々が沢山来て下さって何時
にない賑やかな楽しい新年を家族揃って
迎へた」と『関東大震災日記』続編(横浜

開港資料館保管)に記していた。人びと
は前にむかつて足を進めつつあった。
しかし、それから半月後の一九二四
年一月一五日午前五時五〇分、横浜は
再び大きな揺れに襲われた。関東地震
の最大の余震とされる丹沢地震の発生
である。震源は神奈川県西部、地震規模
はマグニチュード七・三で、犠牲者は一九
人にのぼった。人びとはこの地震の衝撃
を日記に認めている。今回は歴史の中
に埋もれた丹沢地震の状況を被災者の残
した記録から追いかけていきたい。

地震発生

一月六日、松山から横浜に戻った八木
熊次郎は「地震は相変わらず殆ど毎日襲
てつくる」と、余震の発生状況を日記に
記している。そして一五日には、「早朝午
前五時過ぎであった。自分はまだ床の中
に居たのであったが、遠くから何か押し寄
せて来るやうな地鳴りがしたと思ふと
烈しい振動が起つた」と、地震発生時の
様子を記録する。上反町(現・神奈川区)
の熊次郎の自宅には、弟の家族も避難し
ており、激しい揺れに襲われながら全員
で外へと逃れた。八木は日記に「庭は一
面霜柱が針のやうに立っている。寝巻姿
の上に素足だから寒くてたまらない。ま
だ盛にゆれている」と記しており、気温
の下がった冬の朝の様子がうかがえる。

八木家周辺の住民たちも外へ逃れ、落
ち着かない様子だった。ただし、熊次郎
は「幸に朝餉の仕度前であったため火災
が起らなかったのは何よりの幸であった」
としており、火災による被害はまぬがれ
た。小学校に出勤するため、横浜市電の
神奈川停留所にむかうと、電線は切れ、
水道管も破裂していた。おそらく火災が
発生していたら、水道消火栓を用いた消
火活動は難しかっただろう。さらに「人々
は九月の大震災当時のやうに不安な顔つき
で右往左往していた」という。再び関東
大震災の記憶が蘇ったと考えられる。

ひろがる流言

薄荷商の多勢正平(「多勢商店」経営
者)の三女であった幾代は、戦後、関東大
震災の体験を回想記(久野明子氏蔵)に
まとめた。そのなかで、「一月十五日。未
だに月日を忘れないでいる。九月一日の
震災以来の大きな地震に見舞われた」
と、丹沢地震のことを記している。再建さ
れた西戸部町字境之谷(現・西区)の自宅
で被災した幾代は、八木熊次郎と同じよ
うに裸足のまま外へ逃れたという。幾代
は、「足先が急に冷たく感じて、パタパタ
と足踏みさせていた」としており、自宅に
戻った後も「布団に入っても足は冷たく、
なかなか寝付かれなかった」としている。

夜が明けると、横浜市内では様々な
情報が飛び交った。その内容について幾
代は、「今回の地震で関西方面が全滅し
たとか、何月何日、何時何分に再び東
京横浜方面に大地震が起るとか、あ
る有名な占い師が発表しているとか、町
の噂は数限りない」と記している。そう
した情報に家族が脅えるなか、父親の
正平は「そんな噂は信じなくてよい」と
言ったが、祖母のカクは信玄袋に貴重品
を入れ、地震の発生に備えていた。

結局、噂された日時には何も起こら
ず、多勢家の人びとは安堵する。幾代は
「流言飛語という難しい言葉をこの時
初めて父から教えてもらった。誰がど
こでどうやってこんな事を言い始めるの
かしら。人騒がせなこと。その他、九月の
大地震でナマズが地下にもぐって活発に
活動し始めたので、田や畑は二度と使用
出来なくなる。ねずみが急速に繁殖し
て人間を食い殺すほどになる等々。考え
ればたあいもないものばかりだったが、
人々には恐ろしい言葉であった」と、流言
の影響を記している。

内容の詳細はわからないが、熊次郎も日
記に「人々戦々恟々として流言飛語が盛に
行はれ此寒空に戸外で火を焼き野営する
ものも少なくなかった」と記録している。関
東大震災では、「朝鮮人暴動」に代表され
る根拠のない情報が拡大し、被災地は混乱
状況に陥ったが、四ヶ月後の地震でも同様
の現象が発生した。教訓として、災害時の

情報には注意する必要があるだろう。

社会基盤の被害

激しい揺れは大綱村も襲った。飯田助夫は一月一五日の日記の欄外に「午前五時五十分強震あり」と記したほか、本文中に「今暁の強震は本県下最激烈にして震源地は丹沢山地付近の由、県道中地裂し、地之り等あり。昨年震災後手入したるも亦元の通り歪たる所、概して多し。鳶及大工の忙しき年ならむ」と記している。また、厚木町や秦野町、小

田原方面の被害が大きいとされたほか、翌一六日には、「震源は丹沢山付近」、「九月一日の余震」とも記述している。丹沢地震は発災時から関東地震の余震として、人びとに認識されていた。この地震では、通信網や報道機関が無事だったため、災害情報の伝達は早かった。

一五日朝の出勤の際、徒歩で元町にむかう八木熊次郎は、「大江橋の処へ来ると号外が掲示されていた」としており、「水道の破裂、汽車の轉覆、トンネルの崩壊、市及び郡部の死傷者(今度は郡部

の被害が甚大であった)震源地は丹澤山だとの事であった」と被害情報を日記に記している。発災から数時間後のことなので、不正確な部分はあったかもしれないが、震源等は人びとに伝わっていた。『都新聞』などの報道によれば、横浜市内では、三人の犠牲者が出たほか、既述のように、水道の断水も生じている。横浜市民が飲料水等に困るなか、横浜市水道局は横浜港に停泊する船舶から水の供給を受け、給水車で給水活動を展開していった。また、市電を運用する

電気局も散水車を給水車に転用して水道局の支援にあたった。被災者たちは再び飲料水等に苦勞することになった。

関東地震と比べ、丹沢地震の被害はわずかであったものの、復興にむけて歩み始めた人びとに衝撃を与え、災害時の困難を再び呼び起した。本震の存在が大きいため忘れられているが、重要な災害である。熊次郎は日記の最後に「真に泣面に蜂とはこのことだらう」と丹沢地震に関する感想を記している。

(吉田律人)



都橋付近で活動する給水車 1924(大正13)年1月 早川写真館撮影 横浜開港資料館蔵

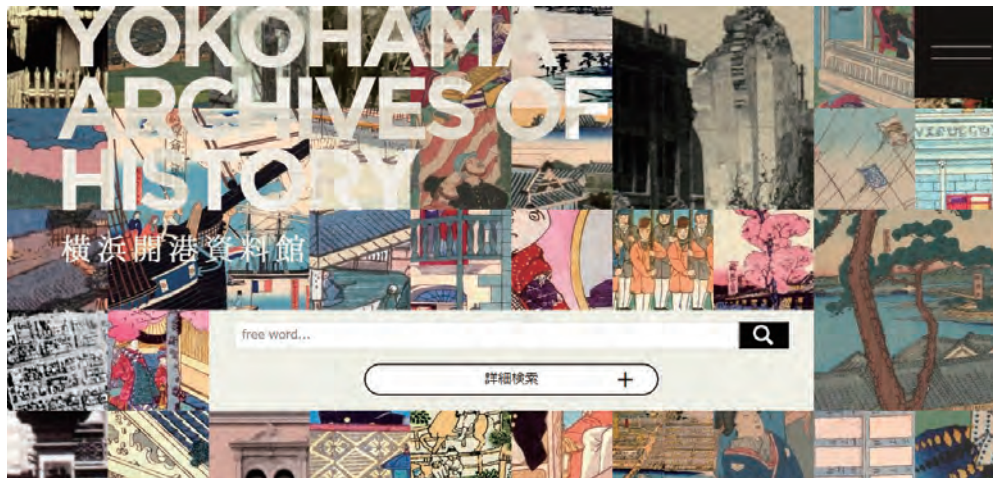


横浜市電気局による給水活動 1924(大正13)年1月 中野春之助撮影 横浜都市発展記念館蔵



散水車から給水を受ける人びと 1924(大正13)年1月 中野春之助撮影 横浜都市発展記念館蔵

横浜開港資料館 デジタルアーカイブ 公開



トップ画面 (<https://yokohama-archives.jp/>)
こちらからもアクセスできます



資料種別・テーマ検索画面



ピックアップアーカイブ画面



詳細情報画面

横浜開港資料館
デジタルアーカイブ
には随時データを
追加していきます。
今後も収蔵資料の
魅力を発信、皆様
と共有し、より利
便性の高いデジタル
アーカイブとなるよ
う日々改修を続け
ていきます。ぜひご
活用ください。

(神谷大介)

ご確認ください。

二〇二四年一月一〇日(水)、横浜開港資料館デジタルアーカイブを公開しました。横浜開港資料館が収蔵する資料のうち、約三万二〇〇〇点の情報にアクセスできます。さらに古文書・写真・絵葉書・絵地図・浮世絵・絵画など、約八〇〇〇点にのぼる多彩な画像を登録しています。インターネットを介して、いつでも、どこでも、どなたでも閲覧・検索することが可能です。

多彩な検索機能

デジタルアーカイブでは、フリーワード検索や項目別の詳細検索に対応しているほか、「古文書」「写真」「絵葉書」「絵地図」「浮世絵」「絵画」等の資料種別に対応して、あるいは「ペリー来航」「横浜開港場」「商館」

「生糸」「東海道」「鉄道」「馬車・人力車」「船」「キリスト教」「寺社」「関東大震災」「横浜市政」等のテーマに対応して、ワンクリックで関連資料を表示できます。さらに地図からエリアを選択して写真や絵葉書等を閲覧することもできます。スマートフォンやタブレットを片手に過去と現在の風景を見比べながら街歩き。歴史の臨場感を体感してみてください。

ウェブで楽しむテーマ展

デジタルアーカイブを介したウェブ上の展覧会。それが「PICK UP ARCHIVE (ピックアップアーカイブ)」です。時節に応じたテーマを設定し、関連資料を紹介していきます。アメリカ東インド艦隊司令長官

マシュー・カルブレイスパリーの横浜上陸、日米和親条約調印から一七〇年を迎える本年第二弾は「ペリー横浜来航170年」と題して黒船絵巻や刷り物などを取り上げました。テーマは定期的に更新していきますので、お見逃しなく。

請求番号の確認

資料の「詳細情報」画面を開けば、画像を拡大表示できるほか、「請求番号」を確認できます。出版・展示・映像制作・商品開発等、画像資料(複製資料)をご利用になる場合は、まずデジタルアーカイブにて請求番号を調べたうえでご申請ください。ご利用手続きの流れはデジタルアーカイブの「複製資料(画像類)の利用にあたって」をご覧ください。

閲覧室より

新聞の閲覧方法について

◆新聞発祥の地 横浜

安政6(1859)年6月2日の開港以来、横浜には約40年にわたって国内最大の外国人居留地がありました。居留地内には外国人社会が形成され、海外からの情報も入ってくるようになります。横浜は海外からの情報が入ってくるのと同時に、日本の情報も海外に発信され、日本と外国とを結ぶ重要な窓口となります。居留民向けに外国語新聞が発行され、さらに日本語の新聞も発行されました。新聞発祥の地として、「日本国新聞発祥之地」の記念碑が現在の中華街関帝廟通りにあります。1864年～1865年頃にその場所でジョセフ・ヒコ(日本名:浜田彦蔵)が『海外新聞』を発行したことを記念して設置されました。

横浜開港資料館(以下、当館)の閲覧室では幕末から昭和期にかけての横浜に関係する国内外の新聞約330タイトルを閲覧することができます。本稿では新聞の閲覧方法と欧字新聞のなかから幕末におきた事件を紹介します。

◆新聞の閲覧請求と取扱い

当館では開館以来、横浜に関係する国内外の新聞の収集に努め、公開してきました。当館にどのような新聞資料があるのかは、当館ホームページの「閲覧室でご覧になれる資料」等で確認できます。閲覧する資料が決まりましたら、閲覧室の予約をお願いします(閲覧室は事前予約制となり、予約方法等の詳細は当館ホームページをご覧ください)。

新聞資料は、当館が所蔵している原資料もあれば、国内外の機関からマイクロフィルムで購入・収集したもの、複製版など多岐にわたります。閲覧室では、複製・複製版か原資料(原紙)の2種類で新聞資料をご覧になれます。

現在、マイクロフィルムで購入・収集したThe Japan Gazette紙、The Japan Times紙やNorth-China Herald紙などの英字新聞は複製で公開し、多くは閲覧室に開架されています(開架されていない新聞資料は閲覧請求が必要となります)。これらは複製版とともに電子式複写(コピー機)可となっています。一方で、原資料で閲覧する欧字新聞The Illustrated London News紙やLe Monde Illustré紙などは撮影(自写)のみの対応となっています(写真①)。閲覧室に開架されていない資料や原資料の閲覧を希望する際には、入室時にお渡しする「入室・閲覧票」に請求番号・資料名・発行年を記入し、受付カウンターへご提出ください。1回に出納できる点数は10点までとなります。

新聞資料を閲覧するにあたり、原資料のなかには紙の状態が良くないものがあり、古文書と同様に細心の注意が必要となります。資料に触れる前に手を洗い、ネックレスや指輪などの装身具、腕時計など資料を傷めてしまう恐れがあるものは外してください。もっとも注意すべきは新聞をめくるとき、紙を傷めないようにやさしくめくってください。閲覧室内での飲食や鉛筆以外のボールペンや万年筆の使用は厳禁となっております。

◆幕末の事件を伝える欧字新聞

2024年はペリー横浜来航170年となります。The Illustrated London News紙1853年5月7日号にはペリー艦隊が日本に向かった様子を報じて、イギリスでも日本開国のために派遣されたアメリカの艦隊に大きな関心を寄せていたことがわかります。開港後しばらくは、攘夷運動が活発化し、外国人殺傷事件が横浜・江戸で頻発する不穏な情勢でした。欧字新聞には



【写真①】当館所蔵の欧字新聞(原資料) 上:L'illustration紙 左:The Illustrated London News紙 右:Le Monde Illustré紙

外国人殺傷事件を伝える記事が記載され、日本で起きた事件はヨーロッパまで伝わりました。本稿では生麦事件の2年前に起きたある事件を紹介します。

Le Monde Illustré紙1861年3月30日号に「江戸フランス公使館の守衛に対して犯された襲撃」と題して記事が挿絵付で記載されます(写真②)。事件は1860年10月30日、フランス公使館が置かれた江戸・濟海寺の門前で起きました。イタリア人のナタル(Natal)という公使館で旗番を務めていた人物が侍に切りつけられます。ナタルは無事でしたが、記事には「外国人を標的とした襲撃事件が頻発し、外国人の生命が脅かされているのに政府(幕府)が見て見ぬふりをしていることに領事から強く抗議することを望む」とあります。しかし、このあとも外国人殺傷事件は続き、1862年に生麦事件が起き、そして薩英戦争が勃発します。

当時の国際情勢や世論の関心、人々がどのように物事を考えていたのを知る資料として新聞は有効です。横浜には外国人居留地があったことで海外からの情報を得ることができ、発信されたりもしました。こうした新聞資料は横浜の歴史文化を知る手がかりの1つとなり、当館では今後も新聞資料の収集・調査・公開を行います。

(白井拓朗)



【写真②】Le Monde Illustré紙1861年3月30日号 (当館蔵)



ペリー横浜来航、日米和親条約締結170周年の今年、記念特別展(本紙P2~特集)の他、ミニ展示や関連イベントを開催いたします。

特別展

「外国奉行と神奈川奉行」(仮称)

ふたつの組織の実態をあきらかにするほか、外国人との折衝の最前線で活躍した「外交官」たちの姿も浮き彫りにします。

会期: 2024年9月21日(土)~11月24日(日)予定

会場: 企画展示室

会期中に関連イベントの開催を予定しています。詳細は決まり次第、ホームページ等でご案内いたします。



江戸のイギリス公館での幕府の役人とイギリス人当館蔵

ミニ展示

ペリー横浜来航170周年記念ミニ展示

会場: 常設展示室内ミニ展示コーナー

◆パート1

「描かれたペリー艦隊」

会期: 2024年2月16日(金)~5月16日(木)

多くの人の関心を惹きつけた、ペリー艦隊とアメリカ人たちを描いた絵巻物を紹介します。

◆パート2

「ペリーから伝わったモノたち」

会期: 5月17日(金)~8月15日(木)

ペリーにまつわるモノ資料から、当時多くの人々に影響を与えたことを紹介します。

◆パート3

「海防御固図の世界」

会期: 8月16日(金)~11月21日(木)

当館収蔵の海防御固図(かいぼうおかためず)(幕府が諸大名に命じた警衛の配置図)から、横浜周辺における海防体制の変遷を紹介します。

◆パート4

「モーリー大尉の日記」

会期: 11月22日(金)~2025年2月20日(木)

ペリー艦隊の一員で海図や水路図作成の専門家、モーリー大尉自筆日記から、彼がどのように測量を行っていたのかを紹介します。

寄贈資料

・熊谷伊助関係文書 178点
(熊谷充子氏)

・セント・ジョセフ・インターナショナル・スクール関係資料 101点(TomHaar氏)

ミュージアムショップ&カフェ PORTER'S LODGE

・「第1回ミュージアムグッズコンテスト」を開催し、市内在住在学の学生・生徒から247点もの作品が寄せられました。審査を経て、大賞受賞作品は今後商品化を進めます。

・中国茶の販売を始めました!横浜の銘菓と一緒にぜひお楽しみください。

協定締結

横浜開港資料館を管理運営する(公財)横浜市ふるさと歴史財団は、今後の活動に向けて市内で活躍されている企業とスポーツ文化および歴史の普及啓発に関する協定書を締結しました。

◆株式会社横浜エクセレンス



(右から)(株)横浜エクセレンス 桜井直哉代表取締役社長・佐藤信財団代表理事・西川武臣館長

◆株式会社三陽物産



(右から)佐藤信財団代表理事・(株)三陽物産 山本博士代表取締役社長

横浜開港資料館 利用案内

開館時間 9:30~17:00(入館は16:00まで)

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始ほか

入館料 一般200円 小・中学生/横浜市内在住65歳以上100円

*特別展、企画展開催時の入館料は別に定めます。

閲覧室の利用について

事前予約制(先着順)です。閲覧希望日前日(の開室時間中)までに、電話で予約してください。

開室時間 10:00~12:00 13:00~16:00

休室日 月曜日・火曜日(祝日の場合は翌日)、資料整理日(毎月第4金曜日)、年末年始ほか

利用料 100円(閲覧室のみご利用の場合)

電話番号 045-201-2150(直通)

ミュージアムショップ & カフェ PORTER'S LODGE

営業時間 9:30~17:00(カフェラストオーダー16:30)

店休日 開港資料館に準じます

アクセス

・みなとみらい線「日本大通り」駅4番出口から徒歩2分

・JR関内駅(南口)、市営地下鉄関内駅から徒歩約15分

・JR桜木町駅から市営バス「日本大通り駅前」下車、徒歩1分

ホームページ

<http://www.kaikou.city.yokohama.jp/>

twitter @yoko_archives

管理運営団体 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団



*今後の状況により変更する場合があります。最新情報は、当館ホームページ・お電話でご確認ください。